

ゼロからのスタート。
かえって、やりがいを
感じました

「世界で自分ができることを精一杯やってみたいと思い、自分の特技を生かせる青年海外協力隊のバドミントン指導に応募しました」と話す竹田さんが赴任したのは、人口約10万で銅鉱山のまちとして知られるモンゴル第2の都市・エルデネット市です。

当時のモンゴルでは、ほとんどバドミントンは知られていませんでしたが、竹田さんは14、15歳の子どもたちを対象に選手を公募し、実際にバドミントンを見て、知ってもらおうことから任務をスタートしました。

「着任したときには、コートもなく、ラケットは日本から持って行った4本だけ。ネットもありません。体育館にペンキでラインを引き、魚網をネットの代用にしました。ラケットのガットが切れると、日本から取り寄せるまで、釣り糸を張りました。何もかもが、ゼロからのスタート。でも、かえってやりがいを感じました」

ライフワークとして
バドミントンを続け
ていきます

竹田さんは、現地のスポーツ委員会と協力して99年にバドミントン協会を設立。自ら指導した子ども



▲竹田さんがバドミントンを指導したモンゴルのみなさん

もたちは、昨年、今年と、国際大会に出場することができました。

「また、国際大会では勝つどころか、1セットも取れません。それでも教え子が1セットに8点取ったときは、感激しました」と、うれしそうに話します。

竹田さん自身が本格的にバドミントンを始めたのは、26歳から。サークルで練習し、腕を磨いて、市民を対象とした教室などで指導してきました。

「バドミントンとの出会いを心から感謝しています。モンゴルでは、純粋で気持ちの優しいたくさん子どもたちに出会うことができました。将来、モンゴルの選手が活躍してくれたら、最高ですね」と話す竹田さんは、これからもライフワークとしてバドミントンを続けていきます。



き ら り

KIRARI

たけだのりお

竹田憲生さん(登別東町)

平成10年度青年海外協力隊員として、今年の7月までの3年間、モンゴル国のエルデネット市に派遣された竹田憲生さん。

バドミントンが普及していないモンゴルでの指導の任務を終え、このほど帰国した竹田さんに、現地での活動やバドミントンへの思いなどを聞きました。

モンゴル国の選手の
活躍が、今から楽しみ
みです。



昭和41年、登別市生まれ。35歳。
京都外国語大学外国語学部英米語学科を卒業後、家業を手伝いながら、市民を対象にしたバドミントン教室などで指導を行う。今年7月にモンゴルから帰国。